

III-8 当院潰瘍性大腸炎患者の意識調査

○福士 道夫
(福士胃腸科循環器科医院)

目的 潰瘍性大腸炎の治療は診断と治療薬の進歩で患者のQOLは向上した、と考えられる。しかし本疾患の発症年齢は10代後半から20代前半と若く、長期治療・経過観察が必須となる。そこで当院に通院中の患者が、疾患・治療・将来についてどのように感じているかの意識調査を行った。

アンケート記入は、その目的を患者に説明し同意を得てから行った。

患者背景

男性15例(平均年齢51.2歳、平均罹病期間12.6年)女性12例(51.4歳、18.5年)の27例で、ほとんどが左側結腸炎型、中等症で、記入時27例中22例が寛解期であった。

アンケート内容

1) 日常生活での悩み、2) 薬剤副作用の経験、3) 精神的負担、4) 社会生活上の負担、5) 治療への不安、6) 検査に関して、7) 治療に関して、8) 医療側への希望、9) 周囲の認知度。

結果

日常生活では、全員がトイレに関する悩みを抱えていた。下痢、血便の症状への悩みも多かった。薬剤副作用はムーンフェイス、湿疹、精神的負担は、再燃や症状悪化への不安、将来への不安をあげていた。治療に関しては、現状でよいが多かったが、落ち着いたら中止したいとの意見もあった。医療側へは、再燃・悪化時の対応、最新医療の説明を希望していた。周囲の認知度では全員が家族内で病気の内容を共有していたが、職場では7割の共有に留まっていた。

まとめ 今後の診察にあたっては、治療内容とともに、精神面での対応も重要と思われた。